

# 佳作

## 『砂の女』 安部公房著

### 文学部 4 年 城内あおば

安部公房の『砂の女』は、砂に埋もれていく閉鎖的な集落にある日突然閉じ込められた男が、砂の集落から必死に逃げもがくというシンプルなストーリーだ。登場人物は、男を騙し砂の集落での労働を強いる村人と、その暗い世界に何も疑わない従順な女のみである。

安部公房は東京で生まれた後、1歳で満州奉天にわたり、幼少期を満州国で過ごした。満州国での生活やその後の引き上げ体験が安部文学のモチーフになっていることは有名である。

彼は日本の帝国主義が作り出したユートピア満州国で、「五族協和」という実態と乖離した理想を教え込まれ育った。五族協和という理想を掲げながらも「支配者と被支配者」という構図が存在する社会において、支配する者への不条理を感じ違和感を募らせていった。

そして、安部公房が満州国ひいては戦争という極限状態において私たちに本当に伝えたかったこと、それは「被支配者の世界」と「無抵抗になってしまった人間の姿」ではないかと、私はこの作品を通して思うのである。

『砂の女』の中で、主人公の男は何度も何度も脱走を企ては失敗した果て、とうとう後一步で砂の集落から脱出できるというのに出口で立ち止まり、自分が幽閉されていた砂の地獄に戻っていく。「なぜ振り返るか。戻っても、砂を掻き出すという単純労働と砂の集落に住む卑しい村人しかいないじゃないか。たとえ、村人に追いかけても死にかけてでも、必死に逃げればいいじゃないか。」この作品を読み終わったあと、私の体には何とも言えない悔しさのみがこみ上げた。なぜこの男は戻っていったのか。この作品について悶々と考えていたその時、私は魯迅の「幻灯事件」を思い出した。

医学を志していた魯迅。ある授業で日露戦争時に日本が勝つ様子を伝える幻灯が上映され、中国人がロシア軍のスパイとして日本軍に殺されるシーンが映し出される。魯迅は驚愕した。なぜか。その時、取り巻いている中国人、そして殺さる中国人自身も、薄ぼんやりした表情をしていたからだった。

人は、支配に甘んじると立ち上がることを諦めてしまう。そして最後、無抵抗になってしまう。そうか、『砂の女』で、砂の集落で生きることを受け止め戻っていく向く主人公も、その弱さを持つひとりだったのだ。そして、現代に生きる私たちも、支配者・権力に対し身を委ね思考停止に陥ってしまう可能性をもっている。

悲しみ悔しみに目をつぶり、自分を騙して流れて生きていくことは簡単であるが、過酷な状況に身を投げ立ち上がることは大変なのだ。

この作品は、私に諦めという麻醉によって立ち上がらない被支配者を直視し、思考停止に陥る人間の弱さを教えてくれた作品である。しかし、支配に甘んじ立ち上がることを諦めてしまうのも人間だが、傷つきながらも何かを変える為に闘うことができるのも人間である。闘うことを諦めないで生きていこう、砂の世界に戻っていく主人公を胸に刻んで私は本を閉じた。